

日本語表現における構成の類型

平 澤 洋 一

1. はじめに

2006年度の4月に、経済学部の新入生を対象とするゼミを担当した。彼らと年間計画を話し合う中で、いわゆるコミュニケーション能力、とりわけ文字による表現能力向上の必要性を痛感させられ、1年かけてスキルアップに取り組むことにした。

まず、学習者の文章表現力を把握するべく、学期初めに「プリテスト」を実施した。プリテストの課題文は、毛利 衛「宇宙の視野での『やさしさ』」（読売新聞 2001. 1. 5 による）を用いた。

[課題文]

次の文章を読んで、感じたこと・考えたことを600字以内で書きなさい。

地球に住む私たちにとって、日々の生活の中で流れる時間は絶対的なものだと思われているが、宇宙から見た時、相対的なものであることがわかる。

球形の地球は、太陽が照らし出す明るい部分が昼で、蔭の暗い部分が夜なのが、一目瞭然だ。地球上に住むすべての動植物には、この球の自転による昼夜の周期が1日になり、その繰り返しが時間の概念を生むのだろう。

一方、地球上空を90分で周回するスペースシャトルの中では、地上での1日に16回昼夜が巡ってくる。地上の生活ペースをいきなり90分サイクルに変えるのは不可能だが、24時間サイクルにこだわる必要もない。実際、6時間を1日とすることで仕事の能率を上げた宇宙飛行ミッションもあった。

また、1年の周期も、宇宙からはよく見える。私が飛行した昨年2月、北半球は冬であり、南半球は夏だった。凍てつく大地が広がるシベリアと真夏のサンゴ礁が浮かぶオーストラリアがほぼ同時に見渡せる。

地球の1年、日々の変化が90分間隔でやってくるため、21世紀の代わり目という時間は、船内にいる宇宙飛行士にとって、物理的、生物的にはそれほど意味をもたない。

スペースシャトルや宇宙ステーションからは丸い地球が2,000キロも見渡せる。北海道から九

州までを同時に見る感覚だ。

太陽に照らされた地上の昼間に、肉眼で識別できる生き物は、青黒く陸地に広がる森林と海洋に緑白色に輝くサンゴ礁くらいである。日本列島は森林の多いことが、実感できる。人間は小さすぎるため見えてこない。幾何学的な畑や灰色っぽい都市の模様、河口での茶褐色の水の色の変化によって、間接的にその存在がわかる程度である。

数十分ほどで、太陽の光が当たらない夜の地球に入る。森林やサンゴ礁は、もう見えない。それに代わって、陸地にはオレンジ色の光が網目のように広がる。日本上空を通過すると、太平洋沿岸では、関東、東海、関西にかけ、ほとんど連続的に、光の集まりが海岸線を縁取っている。昼間は見えなかった人間が、地球上いたるところに生活していたことがわかる。

電気が普及していなかった100年前には、私たちの生活をうかがわせる夜の光は、宇宙から、ほとんど見えなかったに違いない。まして、1000年前では、夜間、宇宙から見えたのは、雷と森林火災、火山の噴火ぐらいで、人間の存在を示す痕跡は、まったくなかったことであろう。

20世紀、人類は、宇宙から客観的に見ることで、地球が唯一生命を育む自然環境を持つ惑星であることを、実感した。

地球の自然環境は、科学技術の著しい進歩に伴って、巨視的に変化した。それとともに、環境ホルモンなどによる目に見えない変化が、急速に広がっている。さらに、分子レベルの遺伝子操作で、人間を含む生命そのものが、変化させられつつある。

巨視的、微視的な空間変化とともに、悠久から瞬間まで、さまざまな時間変化の中で、地球に生まれた生命は、環境変化に適応し、環境を変えながら、40億年、多様化し生き延びてきた。なかでも、人間は、ほかの生命体にはない科学技術を使い、生き延びようとしている。

科学技術が創った新しい環境の中で、いかにバランスよく生命を持続できるか。そこで求められるのは、地球が宇宙空間にある多くの惑星の一つであることを人間の目で捉えた視点、すなわち物事を絶対化せず、相対的に見る視点である。

「地球および宇宙をも視野に入れ、個人の立場をはっきりさせる強い意志、そして人間だけでなく生命全体の将来を考えるやさしさ」を21世紀のキーワードにしたい。

2. プリテストに見る構成の型

学期初めのプリテストでは、構成面で次の4型があらわれた。

A型：対立型。課題文のキーワードとキーセンテンスを正確に捉えて課題文の主張と対立する提言を有し、新規性と説得性に富んだ小論文。構成や表記・表現技法も優れている。

B型：同内容型。課題文の主張を肯定しつつ自分なりの論拠や事例を入れてある。ただし、課題文との対置性がないので、論文末尾は課題文の結論を繰返すにとどまる。

C型：散漫型。課題文の主張を肯定して始まったものの、抽象的な表現に終始するだけ。実証例や調査データもない。論文末尾は課題文の結論を繰返すだけで尻切れトンボ。

D型：逸脱型。課題文の文脈から外れたことに気づかず自分勝手な方向に飛び出していく。構成や表記にも問題点が多く、小論文の体をなさない。

もちろんA型が一番いいわけだが、その数は少なく、B～D型が多かった。したがって必然的に課題文の読み取り方からキーワードおよびキーセンテンスの抽出、課題文に対する自己小論文の「対置性」「実証性」「新規性」などの意義づけ、小論文構成枠の理解、学習者をD型からA型へと底上げしていく段階的な授業が求められた。週1コマでスキルアップするには不安があったが、週ごとに模索しながら進めることにした。

[構成例]

A型：(1) 僕も同じ意見です。日頃生活していて、とても短く感じるけど、地球からしてみればほんの一瞬にすぎないものなのだと感じました。ましてや宇宙からしてみれば。

(2) 自然環境の力はとてつもなくすごいものなのだと感じました。毛利さんの言う様に、地球は唯一生命を育むことのできる惑星であり、最も住みやすい星であることがわかりました。

(3) しかし、現代ではオゾン層の問題や地球温暖化により自然が破壊されてきていると思います。先日、ニュースで、一人の老人が木の種を植えながら旅をしているのを見て感心しました。もっとこういうことを国が企画してやれば今より遥かに住みやすい地球になると僕は思います。

(4) やはり、生命全体の将来、未来を現代人がより深く考えるべきである。

B型：(1) 現在人類が、我々が住む地球を離れ、宇宙へと活動範囲を広げようとする中で、著者は宇宙で地球を見直す機会を得たんだと思う。日常過ごす時間は、地球にいれば絶対的な物に見えるが、宇宙で感じる地球の時間は相対的な物であった、とゆう冒頭の著者の考えは非常に考えさせられるものがある。

(2) 科学技術の変化によってもたらされた今日の文化的な生活の中で、自然破壊が問題視されていることも忘れてはいけないと思う。地球の自然を破壊すれば、人間も地球では生活できなくなる。宇宙の中での地球の役割を考え、地球を生命の住みやすい惑星にしないといけない。著者は難しいことは言っていない。ちょっと見方を変えて、自分のできることを地球に対してすれば良い、ということだけなんだと思う。

(3) 著者が宇宙で見た地球を、人類全員が見ることのできる日がきたら、著者の述べる相対的な見方が簡単にできるのかもしれない。

C型：日本はとても森林が多かったらしいが、今はそんなことはない。なぜなら時代は段々と

進化してきました。機械に頼るようになって、会社を作ったりして森林がなくなってきました。毛利さんが見たあの美しく、輝いていた地球はどこに行ってしまったんだろう。20世紀、人類は、宇宙から客観的に見ることで、地球が唯一生命を育む自然環境を持つ惑星であることを、実感した。というくらい地球、人類は100年というとても速い速さで急速に進化を遂げてきた。事実自分たちが生まれてからでさえ急速に発展したことは納得できる。人間は自分らの甘さに負け森林はなくなってきた。これからもっと自分は毛利さんみたいに宇宙からは全世界が見れないけど自分は自分なりに世界に目を向けて毛利さんの言う「地球および宇宙をも視野に入れ、個人の立場をはっきりさせる強い意志、そして人間だけでなく生命全体の将来を考えるやさしさ」を21世紀のキーワードにしたいという言葉に胸を打って思いました。

- D型：(1) この文を読んで私は今まで当たり前のように電気などを使ってきたがそれは科学技術が創った新しい環境の中に生まれてそれが普通だと思っていたが、実はその当たり前のように身近にある電気は以前自然界で雷のように人間が自由にあやつれるものではなく時が進むにつれて科学技術が進歩したからだと思う。
- (2) 今でもこうして何気なく電気だがこれには限りがある。今までは電気を起こす資源が無くなるなんて考えずにとにかく電気を起こしてきた。それが今では数多くの環境問題を引き起こしている。大気汚染から地球資源減少、さらに地球温暖化も深刻な問題のひとつだろう。
- (3) 毛利さんのように宇宙に行き地球を客観的に見る事ができる人は数少ない貴重な存在であり、その貴重な経験をした人の話をこうした形で聞くことができたことを嬉しく思う。

完全なA型の例は見られなかった。上記の例は、表記力・語彙力が弱く文体の混同もあって印象が悪いものの、希薄ながらも課題文との対置性が見られ、自己の生活経験からの事例も盛り込まれるなど構成力も悪くないことから、かろうじてA型としたが、粗雑な文章であるという謗りを免れ得ない。また、課題文の内容を捉えようと努力している点は評価できるが、課題文に寄りかかって書いているので面白みが出ていないし、第4段落で自分らしい提案・提言ができなくなっている。その主原因は、課題文の内容を肯定するにせよ否定するにせよ、毛利さんの主張に対する対置の視点をまったく考慮しないまま書き進んでいったことにあると思われる。

B型では課題文のキーワード「宇宙」「視野」を捉えて書いている点は評価できる。自己キーワード「相対的」もうまく使っている。が、最終段落における自分の提言がない。表記力・語彙力も構成力も弱い。

C型ではそれがさらに重症になり、段落構成も配慮されていないし表記や文体などの減点評価項目さえ観察される例である。

大別するとD型に該当するのが上記の事例である。課題文の文脈から外れたことに気づかず自分勝手な方向に飛び出していくのが典型的なD型であるが、この事例はD型色をかなり有するという程度に止まっていた。この小論文の評価が上がりなかったのは、3段落の構成をとっているにもかかわらず、第3段落が論理型小論文の役割を担っていないからである。毛利さんの宇宙飛行による貴重な経験に接したことを嬉しく思う、という感得型の表現でまとめたところに論理型小論文としての無理と欠点が生じてしまったという印象を受けた。

2006年度に担当したゼミではA型2名(平均53点)、B型5名(同40点)、C型12名(同24点)、D型5名(同17点)であった。このような言語表現力に問題のある学習者をスキルアップするには、いくつかの方法論を駆使してシラバス、コンテンツ、教具、教授法などに新規性と工夫を盛り込む必要がある。

毛利さんの課題文に対する小論文作成のポイントは、「物事を絶対化せず、相対的に見る視点」の具体例を自分なりの視座から紹介し、相対化の重要性を訴えることである。それには、課題文のキーワードを正確に捉えることが欠かせない。ここでのキーワードは、

- (1) 宇宙
- (2) 視野
- (3) やさしさ
- (4) 地球

この4語と考えられる。タイトルおよび本文中での頻度数は(1)宇宙=11回、(2)視野=2回、(3)やさしさ=2回、(4)地球=13回、(5)相対的=2回。タイトル内の名詞である「視野」と「やさしさ」は頻度数が低いものの筆者が重要と考えてタイトル内に置いた語なのでキーワードとし、「相対的」は重要語ではあるものの近似表現である「宇宙の視野」が文中に存在することを理由にキーワードとしないのがよいと思われる。もちろん自己小論文の中で「相対的」使うのはかまわないし、「宇宙の視野」の代りに「相対的」を自己キーワードにして展開するのも有効な方法である。

3. 表現演習のコンテンツ

学期初めでは年間26講を用意して毎週1講ずつ進める計画でいた。しかし、これでは実情に合わなかった。やむなくペースを半分に落とすことになった。年間の授業項目は次のとおりであった。

第1講：Webシラバス、プリテスト、基本演習、基本演習の解答と解説、文章の目的と種類、小論文採点基準、採点基準対策、スキルアップ1、スキルアップ1の解答

第2講：抄録文の作成、基本演習、基本演習の解答と解説、応用演習、応用演習の解答と解説

スキルアップ2, スキルアップ2の解答と解説

第3講：同内容表現と対立表現, 基本演習, 基本演習の解答と解説, 応用演習, 応用演習の解答と解説

第4講：理系と文系の発表差, 基本演習(基底構造), 基本演習の解答と解説, 『遠野物語』の基底構造, 起承転結型八分法基底構造, 起承転結5部型基底構造, 起承転結4部型基底構造, 3部型基底構造, 応用演習, 応用演習の解答と解説

第5講：同内容3部型, 基本演習, 基本演習の解答と解説, 小論文の自己評価, 応用演習(他者評価1, 2), 応用演習の解答と解説, 小論文—素材集めから構成まで

第6講：対立3部型1, 基本演習, 基本演習の解答と解説, 対立3部型の自己評価, 基底構造および表層構造への入力, 応用演習(他者評価1, 2), 応用演習の解答と解説, 小論文—その書き方

第7講：対立4部型1, 基本演習, 基本演習の解答と解説, ハイブリッド4部型基底構造, 応用演習, 応用演習の解答と解説, レポートの書き方

第8講：対立3部型2, 基本演習, 基本演習の解答と解説, 対立3部型の自己評価, 基底構造入力, 表層構造入力, 応用演習(他者評価1, 2)

第9講：対立4部型2, 基本演習, 基本演習の解答と解説, ハイブリッド4部型基底構造入力, 応用演習, 応用演習の解答と解説

第10講：対立4部型3, 基本演習, 基本演習の解答と解説, ハイブリッド4部型基底構造入力, 応用演習, 応用演習の解答と解説

第11講：対立4部型4, 基本演習, 基本演習の解答と解説, ハイブリッド4部型構成モデル, 基底構造入力, 応用演習, 応用演習の解答と解説

第12講：まとめ(対立, 同内容, 基底構造, 表層構造など)

第13講：ポストテスト

4. 自己評価と他者評価

上記第1講～13講の授業は, Web教材を用いて行う。授業中に入力した小論文は次の評価基準によって採点される。採点は自己評価と他者評価の2種類となり, 他者評価は2名で実施される。

[評価基準]

A. 読解力(15点, 1項目5点満点)

A1 課題を正確に捉えているか?

A2 論旨を小論文に活かしているか?

- A3 キーワードを正確に捉えているか？
- B. 対置力（20点、1項目10点満点）
 - B1 本文の主張に対する「賛否」が明確か？
 - B2 自己の視座が明確に表示されているか？
- C. 発想力（10点、1項目5点満点）
 - C1 発想は新鮮か？
 - C2 発想は優れているか？
- D. 構成力（15点、1項目3点満点）
 - D1 問題提起をしているか？
 - D2 論の展開は適切であるか？
 - D3 制限字数が守られているか？
 - D4 段落数は適切であるか？
 - D5 引用や本文のナゾリが2割以内におさえられているか？
- E. 説得力（20点、1項目4点満点）
 - E1 提案が論理的で分かりやすいか？
 - E2 内容が本文を上回っているか？
 - E3 内容が具体的で説得力があるか？
 - E4 反論に備えているか？
 - E5 心を動かされ共感させられたか？
- F. 実証力（20点、1項目10点満点）
 - F1 実証力のある素材や資料を使っているか？
 - F2 教養や生活経験が表現されているか？
- G. 表現未熟（減点8点、1項目2点減点）
 - G1 主述のねじれがある。
 - G2 不適切な語彙がある。
 - G3 表現にパンチ力がない。
 - G4 文体に「です」体と「だ」体の混同がある。
- H. 表記ミス（減点10点、1項目2点減点）
 - H1 仮名づかいや送り仮名などに誤りがある。
 - H2 漢字が間違っている。
 - H3 句読点が適切でない。
 - H4 記号・符号が正しく使われていない。
 - H5 「事」「為」が平仮名書きになっていない。

表1 プリテストの結果 (2006年4月)

型	学生	小論文の評価基準																									計			
		A1	A2	A3	B1	B2	C1	C2	D1	D2	D3	D4	D5	E1	E2	E3	E4	E5	F1	F2	G1	G2	G3	G4	H1	H2		H3	H4	H5
A	1	4	4	5	5	5	4	4	0	2	3	3	3	4	2	4	0	2	5	5	0	-2	-2	-2	0	0	0	0	0	58
	2	4	4	4	4	5	0	3	0	3	3	3	3	3	2	3	0	0	1	5	0	0	-2	0	0	0	0	0	48	
B	3	3	3	5	3	5	3	3	0	2	3	3	3	2	0	2	0	0	3	3	0	0	-2	0	0	0	0	0	44	
	4	3	3	4	3	3	2	2	0	2	3	3	3	2	0	2	1	1	2	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	39	
	5	3	3	4	4	3	2	2	0	2	3	3	3	3	1	1	2	1	0	3	0	0	-2	0	0	0	0	-2	39	
	6	4	4	4	3	3	2	2	0	3	2	2	2	2	0	2	0	0	3	3	0	0	-2	0	0	0	0	0	39	
	7	3	3	5	2	5	2	2	0	2	3	1	3	2	0	1	2	2	3	3	0	-2	-2	-2	0	0	0	0	0	38
C	8	3	3	3	3	3	2	2	0	2	3	3	3	3	2	2	1	1	2	2	0	-2	-2	0	0	0	0	0	39	
	9	2	2	2	2	2	0	2	3	3	3	3	3	2	0	2	0	0	2	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	33	
	10	3	3	4	0	0	1	1	0	1	3	1	3	2	0	1	0	0	2	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	25	
	11	3	3	4	4	3	2	2	0	1	3	0	0	1	1	1	0	0	0	2	0	0	-2	-2	-2	0	0	0	24	
	12	2	3	0	0	0	1	1	0	1	3	1	3	1	0	1	0	0	1	1	0	0	-2	0	0	0	0	0	17	
	13	2	2	3	3	3	1	1	0	1	3	1	1	2	2	2	0	0	2	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	31	
	14	2	2	0	3	2	2	1	0	1	0	3	3	2	0	0	0	0	0	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	21	
	15	2	2	0	3	2	2	1	0	1	0	3	3	2	0	0	0	0	0	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	21	
	16	2	2	0	3	2	2	1	0	1	0	3	3	2	0	0	0	0	0	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	21	
	17	2	2	0	0	0	1	1	0	1	3	1	3	1	0	1	0	0	1	1	0	0	-2	0	0	0	0	0	16	
	18	2	2	0	0	1	1	1	0	1	3	2	3	2	0	2	0	0	2	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	22	
19	2	2	0	0	1	1	1	0	1	3	1	1	1	0	1	0	0	1	1	0	0	-2	0	0	0	0	0	15		
D	20	1	1	0	0	3	2	2	0	1	3	1	3	3	0	1	0	0	2	2	0	0	-2	0	0	0	0	0	23	
	21	2	2	0	0	1	1	1	0	1	3	0	3	1	0	1	0	0	1	1	0	0	-2	0	0	0	0	0	16	
	22	2	1	2	0	2	1	1	0	2	3	0	3	2	0	1	0	0	2	2	0	-2	-2	-2	0	0	0	0	18	
	23	2	1	1	1	2	1	1	0	1	3	3	3	1	0	0	0	0	0	1	0	0	-2	0	0	0	0	0	-2	17
	24	2	1	0	0	1	1	1	0	1	3	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0	-2	0	0	0	0	0	0	11

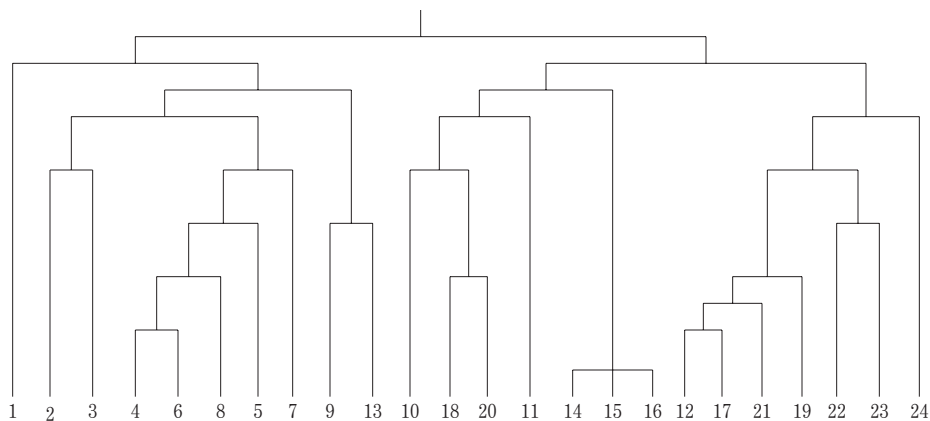


図1 プリテストのデンドログラム

上記の評価基準によって採点された答案是、採点されると学習者本人に送信され、本人は自分の成績のみ閲覧できる。もちろん、教師は学習者全員の成績を見ることができる。

2006年4月に実施したプリテストの評価は表1のとおり。この表をもとにクラスター分析し(ユークリッド平方距離, ウォード法)デンドログラムで表示したのが図1である。表から明ら

かなように、学期初めでは「B1 本文の主張に対する「賛否」が明確か?」「B2 自己の視座が明確に表示されているか?」「C1 発想は新鮮か?」「E4 反論に備えているか?」「E5 心を動かされ共感させられたか?」「F1 実証力のある素材や資料を使っているか?」「F2 教養や生活経験が表現されているか?」「G3 表現にパンチ力がない」の各項で大きく減点されているので、これらを中心に構成法を演習していくことにより、表現力を底上げすることができる。

学習者たちは、小論文を作成するスキルを学ぶことと併行して、小論文の採点を学ぶことによって、文章を相対的に評価しコミュニケーションに活かしていく技術を身につけてくれれば幸いである。

本稿ではプリテストを中心に紹介した。ポストテストの結果は現在集計中であり、結果がまとまったら、Web 表現法のシステムとともに講を改めて述べたい。

参考文献

- [1] 平井昌夫：文章表現法，至文堂，(1969)
- [2] 金田一春彦：日本人の言語表現，講談社，(1975)
- [3] 森岡健二：文章構成法，至文堂，(1976)
- [4] 樺島忠夫・佐竹秀雄：新文章工学，三省堂，(1978)
- [5] 木下是雄：理科系の作文技術，中央公論社，(1981)
- [6] 安本美典：説得の文章技術，講談社，(1983)
- [7] 安本美典編著：国語表現，建帛社，(1988)
- [8] 中島利勝・塚本真也：知的な科学・技術文章の書き方，コロナ社，(1996)
- [9] 飛田良文編著：日本語文章表現法，白帝社 (1997)
- [10] 高橋昭男：仕事文の書き方，岩波書店 (1997)
- [11] Marilyn F. Moriarty (長野 敬訳)：「考える」科学文章の書き方，朝倉書店，(2000)
- [12] 高等学校国語科用 新訂 国語二，第一学習社，(2002)
- [13] 学習技術研究会：知へのステップ ― 大学生からのスタディ・スキルズ ―，くろしお出版，(2002)
- [14] 大阪工業大学言語表現技術研究会：言語表現技術ハンドブック，晃洋書房，(2005)
- [15] 野口尚史，森口稔：日本語を書くトレーニング，ひつじ書房，(2003)
- [16] 三森ゆりか：外国語を見につけるための日本語レッスン，白水社，(2003)
- [17] 荒木昌子，稲田照子，尾関桂子，大道卓，山本薫，口語表現ワークブック，実教出版，(2004)
- [18] 大島弥生，池田玲子，大場理恵子，加納なおみ，高橋淑郎，岩田夏穂：ピアで学ぶ大学生の日本語表現，ひつじ書房，(2005)
- [19] 鹿島 茂：勝つための論文の書き方，文芸春秋，(2005)